

終戦を前にした昭和20年8月13日、大月の町は米艦載機グラマンF6の空襲を受け、中学生、女学生達が若い命を散らしていった。あれから45年、激動の昭和が終わり平成へと改まった今、静かに昭和を振り返ると、そこに去来するのは戦時下の純情な少年時代の忍苦の体験である。若き青年将校へのあこがれ、少年飛行兵への夢、そして決戦へのかげりが色濃くなった時の緊張感と悲慘さ、戦争により肉親を、多くの先輩を、そして友を失ったことを思い起こしていると、悲壮なる「海ゆかば」そして「ああ紅の血は燃ゆる」がバックコーラスのように脳裏をよぎる。人類の永遠の平和を願い、美しい郷土を守るためにも、戦争体験者として、戦争を知らない人々への語り部となり、また、正確に記録保存をする役目があるかと思う。そして、それを自らの昭和史として残していきたい。

19年、私達は大月町の県立都留中学校へ入学した。その当時、父の勤めの関係で同じ町内の真木から通学していた。その年の6月の夜半だと記憶するが、空襲警報発令と同時に学校の警備へと4キロの道を急いだ。次兄も最上級の5年に在学しており、二人で灯火管制の真っ暗な中を出かけたが、雨のやんだ後の道は黒く、足さぐりで歩くような状態であった。笹子川辺りまで行くと蛍が飛んでいた。兄は蛍を採り、手ぬぐいに包んで手に持つととても明るく、ようやく足早に歩けるようになった。だが学校に着くと同時に空襲警報も解除になり、出動した確認を先生にしてもらい帰途についた。その兄も学業半ばに、陸軍特別幹部候補生（二期）として中部第129部隊に入隊した。兄が志願書を書いたのは家族が寝静まった夜半、血書をして提出した。その時、父も母も黙ってうなずいていた。上吉田の実家から出発した兄を、私と妹は真木の笹子川原で列車の通るのを日の丸の旗を振って見送った。

20年6月の農繁期の勤労奉仕から引き続き、7月になると大月の興亜航空に勤労学徒として動員された。興亜航空では飛行機を造っていたが、板金部と木工部があり、木工部では木製の飛行機を造っていた。誰言うとなくこれはおとりの飛行機で、空襲警報になると本物の飛行機は空に退避し、木製のものはおとりとして飛行場に置くものであると。

物不足の時代、制帽も学帽の者あり、戦闘帽の者あり、疎開により転校して来た生徒らは徽章もなく、布にゴム印を押したものを縫い着けていた。ある日、一日の作業を終えて退社する時、正門において会社の守衛により服装検査が行われた。飛行機のジェラルミンの切れ端を徽章の型に切り、持っていた者がその場で取り上げられたあげく殴打された。

その翌朝のことである。入社すると学生は職場に就かず広場に集まれとの上級生の命令であった。やがて当時剣道の達人と言われていた櫻井文三郎先生が見えて壇上に立たれ、昨日の状況を話されたのち「学生は会社に使われているのではない。動員で働いているのに殴打事件に及んでは絶対許せない。会社の責任者の謝罪があるまで就業しなくてもよい。」と言われた。この事件はその日、会社側の謝罪により一件落ち着いたがその時の先生の、学校と生徒の立場を思う心情に深く心を打たれたのを、今も忘れることはできない。学校には羽織、袴で登校されることが多く、文武両道に秀でた超一流の先生であったが、戦後いつとはなく去って行かれた。

興亜航空に動員されていたのは、2年上級の4年生と、私達2年生だったが、後輩指導のため卒業されていた三名の先輩もいた。また海軍の兵隊も何名かいたが補充兵が多く、見るからに栄養不良で体力がなく、若い下士官に殴られていた。そんな人達が「学生さん、なんでもよいから食べるものを家から持って来てください。腹がすいてとてもたまりません」と頼まれ、いり豆を持って行ってやり、たばこをもらって帰ったこともあった。

毎日のように発令される警戒警報、続いての空襲警報に仕事を中断しては山林に防空壕に退避した。退避中に先輩の一人が私達を集めてよく歌を教えてくれた。その歌は軍歌もあれば哀調ある叙情歌もあった。先輩が特に好きな歌は「北上夜曲」であった。この歌は昭和36、7年頃、歌声喫茶で流行しはじめたが、当時、東京で勤めをしていた私は、懐かしいこの歌を歌いたくて幾度か歌声喫茶に通った。今もこの歌を聞くたびに学徒動員時代のことが思い出されてならない。

8月13日の早朝、警戒警報が発令されたが、いつもどおり入社した。会社の通用門をはいると同時に空襲警報が発令された。会社の敷地内の溶岩地帯には馬蹄形に掘られた防空壕が九箇所あったが、一番手前の豪が私達の班にあてられた場所であった。

しばらく中にいたが、なぜか不安になり、友人4人とそこを飛び出し、花咲の友人の家まで逃げた。まもなく敵機の襲来、爆撃と機銃掃射のすさまじさに私達は押入れにもぐって布団をかぶっていた。その間どのくらいの時間だったか記憶も定かでない。静かになったので外に出て見ると、大月の町は空一面褐色に煙っていた。

この空襲により私達のいた防空壕で7名、ほかの場所で上級生1名、海軍の兵隊1名の尊い命が奪われ、そのほか多数の負傷者も出た。翌14日高月橋の下の桂川畔で9名の遺体は茶毘に付された。この時の空襲で都留高女においても20名の女学生達が犠牲になっている。そして翌日15日正午、敗戦を国民に告げる「玉音放送」により戦争は終わった。

数年前のこと戦跡を訪ねて見ると、草に覆われ入り口は埋まっていたが、そのあとは在りし日のまま残っていた。近くにいた人にその当時の話をすると「そうですか、都留中の生徒さんでしたか。あの当時、白線帽の都留中生はあこがれはしたもののとても及びもつかず、私など雲上の人でした」と謙虚な話をされた。

家にいるものは何を食べていてもよいと、弁当だけは米のご飯を詰めてくれた母は、私が無事家に帰った時、泣いて喜んでくれた。その母も昨年秋、92歳で天国に召されていった。月に一度くらいであったが実家を訪れ、よくあの当時の話を交わしたが、今はその術もない。

今年の夏も我が家の庭にカンナの花が真っ赤に咲いている。あの空襲から無事帰った時と同じように。

私の戦争体験は父の出征から始まったのです。小学校三年の夏、昭和十六年七月三十日に家族だけに送られて甲府六三部隊に入隊。その後十月三十日に弟が生れる。父親も弟も対面することなく、お宮参りに家族で撮った写真を送り互いに写真で見るだけでした。本当に父親に抱かれることも又抱くことも出来なかったのです。十二月八日大東亜戦争となり十七年の二月なかば、「戦地へ行くので面会に来るように」と通知があり、母と私の二人で昼食を共にし、その後満州へ行き、七月二十日現地で戦病死したのです。これからは、祖父母と母子供4人の7人家族の大変な生活が始まったわけです。母は看護婦の資格があり、それを生かして、又、産婆の資格を取って村役場へ保健婦として勤め、産婆もやっって何とか生活して来ました。母は子供には高等教育までさせてやりたいと一生懸命働きながら四人の子供を高校まで出してくれました。三十三才という若さで夫をなくした母、今思うと本当に大変だったなあと…苦勞の大きさを感じます。

ところで今度は、小学校～国民学校と変わり、昭和十八年からは、学校生活も毎日防空訓練やら、出征兵士の家の勤勞奉仕作業にと、殆ど勉強はせず、お天気の悪い日は授業といったような日々でした。小学校六年生になり戦争も激しく夜は電燈も外に漏れないように黒い『ほろ』をかけ東京では、空襲警報を出ている様子、ラジオからは日本が戦果を挙げているように報じられていましたが、本当は反対だったのです。大月の上空もB29がゴォー音をたて編隊で通過することも多くなり、空襲警報のサイレンが鳴ることも多くなりました。

昭和二十年の三月、私は都留高女の入学試験を受けることになりました。しかしその勉強も燈下管制の中では夜おそくまで灯をつけていることができませんので、ただ頭の中で色々と考えていました。二十年三月七日入試当日、警戒警報や空襲警報が発令される中、防空頭巾と豆いりの入った袋を両方の肩にかけて、それも筆記試験は全然なく、唯口答試験だけの受験でした。その後も毎日警戒警報・空襲警報の連続で、夜もいつ防空壕に逃げなければならぬかという思いで結局着たままで床に横になっているという日が続きしました。東京空襲の夜は、東の空が夕焼のように真赤になっていました。

都留高女に入学してからも毎日毎日が怖い気持ちで、でも新しいお友達も出来、4ヶ月程は不安と楽しさが一緒になったような…そして八月十三日を迎えました。いつも通りに登校する予定で家を出ました。上級生は先に登校していましたので一年生の私一人、強瀬から宮川写真館の前の坂を登ってあと五分で学校に着くというところで警戒警報が出ました。一年生はその時点で家に帰ることになっていましたからすぐに引き返し興和航空のところ辺で空襲警報になり興和で飛行機の翼を作っていた兵隊さん達や学徒動員でいた人達と一緒に高月橋を渡ったところの松林の中に入っていました。敵艦載機の編隊が空に響きヒューンと下がるとバババーン爆弾の落ちる音と振動・機銃掃射のダダダダ…と生きた心地はありませんでした。何とかして家に帰らなければ…とどの位の時が経ったかはわかりませんが、静かになったので夢中で家に急ぎ帰りました。しかし母だけはおりませんでした。弟に飲ませる山羊のお乳をもらいに駒橋まで行っていたのですが、家の者と一緒に村役場に勤めている二人の方も来ていて皆で心配していましたが、そのうちにまあ無事で帰ってきてほっとしました。それから又、飛行機の音がしたので押入れから布団を全部引っ張り出して何枚も重ねて積み、その下へ家にいた皆ともぐっていました。母の言うのに、綿は弾丸など通しにくいのでという理由だったようです。夕方には、うそのように静かになりましたが、敵の兵隊が来て殺されるかも知れないからというので家から1キロばかり離れた掘抜きの横穴に隣組の人達と入っていました。

暗くなりかけた頃一人の産婦さんが産気付き、ここで生れては大変と母が付き添って自宅へ行き、その夜男の子の元気な赤ちゃんが生まれました。その夜は何もなく過ぎ翌日になって又、アメリカ兵が来て殺されるから山の中へ逃げたほうが良いとのデマが飛び、又皆で今の百合ヶ丘のところにあった杉林の中に逃げていました。

八月十五日は、ラジオで玉音放送があるとのことで、隣組の人達が家のラジオの前に集まり正座して玉音放送を聞き、終わると皆「日本は負けたんだ。くやしい」といって涙を流していたことを覚えています。

私は翌日学校に行こうと大月に出て見てびっくり余りの変わりように、町の中もスムーズには歩けず学校はメチャメチャ、そして進士病院のところまで行って見ると玄関から足の踏み場もない程ケガ人が横たわり痛い痛い苦しい苦しいのうめき声、それに看護する人達でそれこそ大変なことになっていました。音楽を教わっていた先生、多分校長先生もいられたのではないかと思います。学校は当分登校出来ず家のまわりなどの片付けや忙しく色々母に手伝ってやりました。よく調べて見ると裏の屋根に大きな穴があいていて、その下に灰色と黒の丸い物が五十センチ位土の中にめり込んでいました。不発弾だと大変ということで調べてもらいましたら爆風でとんできた川の石だったことがわかりホッとしました。段々色々な様子がわかり浅利に行く途中の岩にあった防空壕で大勢の人が機銃掃射で亡くなり都留高女の生徒も学校の前の壕の中で二十三人の上級生が、小遣いさんの御夫婦はこっぴみじんになってとび散り亡くなり校舎の真ん中と講堂・運動場とそれに林鳳山のまわりにはたくさんの爆弾が落下され桂川にも、又、岩殿の畑の中にも行って見るとすり鉢のような大きな穴があいていました。

都留高女では小さい物資を運ぶ為のパラシュートを学徒動員の生徒が縫っていました。興和ではベニヤのような木製の翼を作り、それを無蓋車に多数並べられていたのです。いやでも空襲されました。

主人は当時、都留中の3年で大月航空へ学徒動員で行っており、宿直室の碁盤を頭の上に置いて窓から興和に爆弾の落ちるところや爆弾で建物が壊れて飛び散る様子を見たとの事です。又後は静かになってから町の中を歩いて悲惨な様子を見つかりと見たとの事です。私の実家のすぐ上の老夫婦も、おばあさんが目の見えないおじいさんの薬をもらいに出てそのまま帰らず、終戦から二日程たって隣組の人達で荒れた町の中を探したら、杉屋旅館の玄関に日本手ぬぐいをかぶりうつ伏せになって死んでいるのが見つかりました。本当に可哀想でした。この様に多数の死者と被害者を出した終戦二日前の大月空襲、本当に悔しさと怒りで一杯です。しかし五分遅かったら学校に着いていた私、ほんの五分という短い時間の警報の出方によって命をなくす事なく今こうして皆様につたない経験ですがお話できていることを幸せに思っております。たった五分の違いで…

山梨県大月市の街はずれ 小高い山の麓にひっそりと建つ女学生の遺髪塚
終戦二日前の昭和二十年八月十三日この地にあった高等女学校が空襲を受けた。
学校は一瞬にして血の地獄と化し二十四人の女学生と職員が犠牲になった。
教師達は教え子の遺体を自らの手で火葬した。その直後に敗戦を告げる玉音放送が流れた
という。

墓誌の中に私の七才年上の従姉妹の栄子さんの名前がある。夏休み中であつたが学徒動
員された生徒達は落下傘作りに連日登校していた。

その日は朝から「空襲警報」が発令され
通学列車を降りて家へ引き返す生徒も多かったが、最上級生の栄子さんは「責任があるか
ら」と学校へ向かった。
土砂の中から救い出されて意識は戻ったものの、完全に聴力を失い一ヶ月後にみまかつた。
十六才だった。

かすかな記憶の底に揺れる従姉妹の面影は、すらりと背が高く涼しげな瞳をして、どこ
かコスモスの花を想わせた。

治療の手だてもなく死の床に伏した時、
「こんな私でも少しはお国のためになれたかしら」と聞こえない耳を傾け必死に問いかけ
たという。

遺髪塚に眠る少女達も同じ思いであつたろう。少女達の思いは閉ざされたまま六十年も
の月日が静かな墓に積もつた。

真下に見える少女達の母校は、今は市立の短期大学と高校になっている。校庭のテニスコ
ートには白いユニホームが舞い、下校する男女で賑わっている。

同じ地で学ぶ若者達は塚に眠る少女達のことを伝え聞いているでだろうか。

あの日のことを知る人は少なくなったが、
どなたかの心づくしの千羽鶴が塚に寄り添い、やわらかな陽差しが墓碑の肩を温めている。

今 私が手向けた薄紅色のコスモスが秋風に揺れて・・・
ここだけが時の流れを堰き止めて静かだ。

じっと耳を澄ませば

あの日のままの少女達の声が聞こえる

—私達は少しでもお国のためになれたかしら—